

The Fulbrighter
in
Nagoya

No.24

November 2014

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter in Nagoya No. 24

目 次

講演

私の対米経験：フルブライト

三重県教育文化会館元相談役 上田慶一 ……3

1964年ひねくれもののEWC生

中部工業大学名誉教授 青井 潔 ……13

EWCワークショップに参加して

愛知大学名誉教授 三好正弘 ……26

会務報告 ……32

会則 ……34

役員名簿 ……35



2013年10月13日



2014年8月1日

私の対米経験：フルブライト

上田慶一 三重県教育文化会館元相談役

司会・星野：それでは時間がきましたので、2013年度臨時総会での講演会を開催します。最初の講演は上田さん、お願いします。

上田：失礼します。わたしがお話しするような内容は、あまりないのですが、依頼されましたので。

お話をさせていただきます。まず初めに、ちょっとメダルを掛けさせていただきます。このメダルは頂きました。どこの大学か、アーカンソー大学。功績があるということで、このメダルを頂いております。アーカンソー・ステート・ユニバーシティです。大学はユニバーシティー・オブ何々というのがありますが、それ以外に何々ステート・ユニバーシティー。アーカンソー・ステート・ユニバーシティーというのは、アーカンソー州の東の方のジョーンズ・ボロ、ミシシッピー川に沿った都市の大学です。わたしがそこで教授をしていたのかと言われると、実はそうじゃないんです。わたしは時々遊びに行くぐらいなんですが、これをもらった理由はいろいろあるんです。これはまた後でお話しします。これが金ですといいんですけど。ご覧になりますか。いいですか。

星野：せっかくだから回していただきます。

上田：たいしたもんじゃない。これはそれなりの記念になります。フルブライト氏とは、2度ばかり会っています。東京でお会いした。2度目はワシントンの法律事務所で会った。その時は車いすに乗っておられました。非常に優しい方で、わたしみたいな者の話を聞いていただきました。わたしは、フルブライト留学試験を通して、その翌年の1963年9月1日に渡米しました。ところがその前年の8月に知人から実は今ベトナムという所が、非常に険悪な空気が出てきて、それで問題になっている。仏領インドシナの情勢が大変厳しくなってきた、フランス軍がダイエンビエンフ等の軍事重要都市から撤退し始めた。そこで米国は軍人たちを派遣して調査をしているというようなことです。ついては、そのうちのアメリカ人の1人が四日市に来て、講演するから出てこないかという誘いで、世界情勢の勉強になると思い、1人でこのこと出かけました。講師の方はベトナムの地図を黒板に書いて、北ベトナムがどのように攻めてきて、今は大変なことになっているのでアメリカ政府は、ここに軍事顧問団を送って調査しているが、どうも危ないというようなことを、長々とお話しされました。その後でちょっと懇談会がありました。僕ともう1人フルブライトで行かれる方がいまして、その人と一緒に話を聞きました。それはそれで終わったんです。

数日後、その講師の方から電話がかかってきました。「ちょっと東京へ出てこないですか。米国での勉強に参考になることを話すから」とおっしゃるんです。ここからがちょっとミステリー風になるのでございます。東京へは新幹線がない頃です。東京オリンピックは、その翌年ですから、まだ新幹線がない。それで「東京を歩いて、どこへ行くんですか」と

言ったら、「渋谷です」「えっ、渋谷、渋谷のどこですか」「ガード下にてんぷら屋があるから人にあまり気付かれなように会いたいんだ。そこで夕方から会いたい」。こう言うんです、時間を指定して。目つきのピシッと、いい顔をした人でした。

僕もアメリカへ行く身ですから、アメリカ大使館にはお世話になると思いまして、のこのこと行っただけです。そこで話されたことです。「あなたも分かっているように、アメリカがベトナムで非常に窮地に陥っている。こういう問題について、政治的にいろんな見解があるけれども、あなたはどう思います。」「わたしは、そういうのは、分かりません。」ぼやかして言っていたんです。

そうしたら、アメリカへ行ったら、特にこういう面で政治的な動きが出てくる。反戦運動というのが盛んになってくる。だからそういうのをじっくりと見なさい。それから公民権運動というのがある。この公民権運動というのが、今年の8月号に、50周年ということで載りました。このルーサー・キング牧師が載りまして、デモンストレーションがあった。1963年8月28日に、25万人のワシントン大行進というのがありました。リンカーン・メモリアルからキャピタルヒルまでの、いわゆるモールという所です。その真ん中にリフレクティング・プールがありまして、ワシントンモニュメントがあります。それをずっと囲むようにして、25万人がここに集合した。そしてデモをした。これは何のデモかというのと、人種差別撤廃です。公民権運動ですから、すべての所で平等に扱ってほしいという黒人たちの運動です。

それに賛同する白人たちもいっぱいいました。ここで、有名なジョーン・バエズとかそういうのもいまして、歌を歌ったりした。特に有名なのはワン・スピーチ、いわゆるワン・メンです。これは8月号のタイムですけども、ここに載っているように、50周年記念として出ております。俳優たちもいっぱいワシントンに集まって行進します。ここに黒人と彼らを雇っている地主が、共にジョージアの丘で食事ができるように、そういう世の中にしようという有名なスピーチをキング牧師がここで言われた。こういうようなことが後であるんですけども、わたしはまだ聞いていなかったんです。こういう公民権運動というのが非常に盛んな国です。おそらくあなたはそういうことを見るだろう。よく観察してください。よく勉強してください。こういうような励ましなのか、気を付けよというのか分からなかった。それで帰っていいということで、終わったんです。

そうしたら、わたしが出発する羽田に留学生たちがいっぱい集まったんです。ところがわたしのところに1人あのアメリカ人が来てくれました。そしてわたしの肩を抱いて、ここまで見送りに来た。だからしっかり勉強してきなさい。しっかり勉強する、考え方がいろいろあるからね、というふうに思ったんですが、そこでお礼を言って、アメリカへ飛んだわけです。ハワイ経由でサンフランシスコへ。こういう公民権運動というのが、どうも心の中にありました。それからベトナム問題というのが残りました。みんなで向こうに9月1日に到着し、それからワシントンへ行って、カーライル・ホテルという宿舎に泊まっているときに、道にたくさんバッジが落ちていると言うんです。

それは黒人と白人が手を結んだバッジです。ここにもあります。それが無数に落ちている。何かがあった、それは知らなかった。そして教育局での研修があり、その時に公民権運動の問題についての話がありました。この問題には非常に根深いものがあるということで、武力闘争にならないように、平穏に解決していきたいというようなことを言っていました。

この話は総論として聞いておったんですが、ワシントンでの研修を終えて、わたしたちはテキサス大学で研修するためオースティンという首都にある、テキサス大学に行きました。そこに行って、まず宿舎を決めなければならないです。それでインターナショナル・オフィスが世話をしてくれるんですが、ちゃんと用意してあったところは、インターナショナル・エイカーズという、留学生のための宿舎です。2人1部屋です。テキサス大学へ行く学生だけが列車に乗って、2日間かけてセントルイス経由でやってまいりました。テキサスは初めてだし、もちろんアメリカへ来るのも初めてですから、どんな所だろうと胸ときめかせていました。映画で見たけれども、夜、汽車の窓からパッパ、パッパと、海を走っているようです。真っ暗で、地平線が水平線のようです。ウワーッこれがテキサスかと思いました。そしてテキサスのオースティンの駅に着いたら、首都なのに小さい駅だなと思いました。迎えに来てくれていました。その時にルームメイトを決めなさいと言われて僕は黙って、誰でもいいと思ったら、1人のラテンアメリカから来た留学生が手を上げて、僕と一緒に住まないかと言われたんです。いいよと言って一緒に住みました。彼がエルネスト・ロンベータと言うんですが、この人は苦勞して、苦勞して、留学試験を通して、そして大学に行ったんです。わたしは、初めは何も分からないですから、一緒に勉強するということになったんです。

アメリカへ行ったら、アメリカの大学院学生と一緒にあって、しっかりと勉強しよう。もう1つは車を持っているやつと一緒になろう。なぜなら生活するのに車がないと何もできないんです。ウォッシュテリアとか、知らない言葉がある。誰も外には洗濯物を干してないんです。洗濯物を外に干そうと思ったら、恥ずかしくて格好悪いんです。うっかり食堂の後ろの物置の所に干して置いたら、それを開けられて恥をかけたこともあった。ウォッシュテリアという、有料のところみんな持っていくんです。そして外に干さないんです、ドライヤーがあるから。それも知らなかった。今から50年前の話です。日本では洗濯機で洗っているぐらいです。そういうような生活に慣れるためには、あるいは生活を知るためには、やっぱり現地の人と住むのが一番いいと、僕はもう初めから思っていた。

次に皆さんはご存じかと思いますが、日本には駐日大使でアマコストという人がおみえになっていました。この人が後になって言われたんです。こういうふうテーブル越しで話をしないで、テーブルの向こう側に行って、一緒に側になって話をしなさい。そういう気構えで勉強しなさい。僕らはアメリカというのは日本と対比して、向こう側で見ますが、向こうのアメリカと一緒にようになって、同じように問題を考えなさい。これを言われていたんです。わたしはアマコストさんに3回ぐらいお会いしました。後日、三重県にソ連

のゴルバチョフさんとアマコストさんがみえて、ディスカッションをされたんです。わたしはそれを聴講したんです。こういういろいろな人に出会って、いろいろなことを教えられました。できるだけ彼らの中へ入ろうというふうに思ったんですが、アジア人が現地の人の中に入るのは、はじめは難しいです。ワシントンで物乞いの黒人にお金を出し渋ったらいエロージュウと言われましたから。何しろ有色人種に対して、どうも偏見を持っているという感じでした。特に共和党で、民主党が弱いテキサスですから、もうフルブライトといったって、フンと言うようなもので、どうも風当たりがちょっと違うという感じでした。

その中でフルブライト学生として、どのように生活していくか、彼ら土地の人と仲良くなるのにどうしたらいいか。まずテキサスということを知ることだと思いました。テキサスという名前はどういう意味か知っているか。分からない。友情という意味だ。だから非常に愛情があるんだ。他人に対して温かい気持ちで迎えるんだ。これがテキサスという意味だ。テキサスは独立した国でもあったんだ。だから独立心が強い。北部の者などとは全然違うんだ。独立していたんだ。かつての西部劇に出てくるいろいろな名前を言うんです。それを聞いてもわたしは、映画で見たようなことはあるというぐらいの話です。

もう 1 つは、その時に州の歌を覚えなければいけないと思ったんです。どこでも聞きます。テキサス、ああ、テキサスという歌があるんです。いい歌なんです。それを覚えること。それから大学の校歌を覚えること。校歌は所々でよく歌うんです。フットボールの大会の時でも何かあるときに歌うんです。留学生は、案外そんなことに無頓着なんです。これは覚えなければいけない。テキサスの州のモットーは何かというのも調べていなければいけない。そしてできるだけ聞くことです。ところが、外国人にとって、仲良くなるというのは難しいです。わたしが、この学校の校歌というのはどんなものかと聞いたら、**The eyes of Texas** という、テキサスの目という意味なんです。**The eyes of Texas are upon you** という歌です。メロディーを聞いたことがあると言ったら、列車の歌です。「線路は続くよ、どこまでも」のメロディーを使っている。**The eyes of Texas are upon you all the live long days. The eyes of Texas are upon you. You cannot get away** 逃げられないんです。**Do not think you can escape them** という歌で、何か怖い歌なんです。これが至るところ集会で歌うんです。それを覚えました。そういうようなことをして授業を、受けることになってまいりました。

身体検査というのもあります。厳しいです。身体検査で 10 名なら 10 名集まると、男の者は、みんなで行ったんです。そしたらびっくり仰天、全裸です。手ぬぐいも何もないです。その場で脱げ。徴兵検査みたいなものです。そして全部調べられます。エエーッというようなものでした。テキサスはそうでした。そういう日本ではできない体験をしながら、何とかアメリカの学生の中に入っていきたい、そしていろいろなことを学びたいというふうに思いました。エルネストというエクアドルから来た学生と入っていたんですが、スペイン語が時々出てくるし、バスルームとトイレはとなりとの共同。となりはドイツの学生

がいます。ワイワイ、ワイワイと騒ぐ、どうも落ち着かないと思った。それで 1 人でずっと歩いていてドラッグストアにちょっと入ったときに、学生たちがコーヒーなんかを飲んでいる。僕が入っていったら、1 人の学生が、「ああ、あなたは日本人か」と言いました。これがまた因縁です。この男はジェフリー・S と自己紹介したので「そうだよ」と言ったら、「そうか、何だ。留学生として来たんだ。そうか、僕は板付エアースペースにいた。自分の父親は空軍将校だった。そこで子どもの頃に育った。だから日本は懐かしい。いい国だった。」と言ったんです。

もう 1 人の男はフィリップ・R とって、これは黙って聞いている。これは大学院の学生なんです。「実は僕は部屋を探しているんだけど、いい所はないか」と言ったんです。「アメリカ人と住めるような所はないか。」「そうか、僕たちはいまは一緒に住んでいるんだけど、僕は出ていくんだ。だから僕の後へ来たらどうか」と言われたんです。それなら言うんで部屋を見に行ったら。まあまあの部屋なんです。ちょっと半地下になっていて、半分からは地上に出ている。まあ、これでもいいや、安いと思ひまして、そこに決めました。

ジェフリー・S は別の所に行きました。後に彼は有名になるんです。その後ニューヨークへ出て、ジョン・レノンと知り合い彼といろいろ関わるようになります。ジョン・レノンが、ニューヨークの彼のアパートに訪ねてきたということをメールで送ってくるんです。そしてオノ・ヨーコも来たらしいです。ニューヨークに出る前は、学生たちで公民権運動が非常に盛んでした。彼は、僕をファースト・ネームで呼びます。「ケイイチ、学校の勉強も大事だが、このテキサスは非常に保守的だから今、町を歩いてみなさい。レストランに札がいくつか掛かっている。それを何と解釈する。」そう言われました。ずっと歩きました。この店は、オーナーが入場拒否をすることができる店です。そういうのが張ってあるわけです。それから駅へ行きました。ウェイティング・ルームへ行くと、カラー、ホワイトと分けてあります。僕はカラーの方に行きましたら、黒人がギョッと睨んで出ていきました。パブリック・トイレに行きますと、カラー、ホワイトと書いてあります。こういうのを見てきて、ああ、そうだなと思ったんですが、ジェフリーは、「見てきたら、僕らはこれをなくす運動をしたいと思っているんだ」こう言うんです。彼は 1 週間に 1 回は、大学の構内で演説をするんです。ダンプというのをやるんです。そういうのを見て、おれがあんなやつと一緒にいたら、疑われるんじゃないかという気がしたんです。個人的には親しくしていましたが、できるだけそういう場には行かないようにしていました。

ところがある時です。シット・イン・プロテスト、座り込みです。「これを僕らは計画している。けいイチ、おまえもちょっと関心があれば、見てみるといい。だけど絶対に僕らの近くに来てはいけないよ。あなたは外国人だから逮捕される。」自分の部屋にいるフィリップも彼と同様なんです。一緒に住んでいる以上、それを見ようということになった。その前にどうするか。大学の寮は、黒人は黒人だけで、白人とは全部隔離しているんです。まず夜に黒人の寮に行くんです。行って、説得して何人かを集めるんです。日曜の昼、教会へ行った帰りの家族が寄るピカデレイというファンシー・レストランが、町の中心にあ

るんです。そこで座り込みをするから、30人ぐらいを集めよという指示をするんです。その幹部は、僕の部屋へ来てちょっと打ち合わせをしている。いろんなことを言っているその中で僕は彼らの話を聞いていました

いよいよ日曜日にそこへ行くことになった。わたしは1人で事前に入って、レストランでいろいろなものを自分で取り、お金を払ってテーブルに座ります。彼らジェフリーやフィリップその他の白人たちも、全部バラバラに入ってバラバラに座ります。1人が廊下のガラス越しに外を見てみると、向こうのブロックの角に白人や黒人たちが、30人ぐらい顔を出してずっと待っていて合図をすると彼らが行動開始するんです。やがて時間となり、合図をする。入ってくる。ドアを開けて入ってくると、大きな体の用心棒が来る。棒でもって押し出そうとする。大騒ぎになって、みんな教会帰りの家族の人が総立ちになって、ウワッと騒ぐ。僕はの中で黙って事態を見ていました。それから店の人が警察を呼ぶんです。しかし警察がなかなか来ない。30分ぐらいしてから、ウーウーとサイレンが聞こえると、みんながバーツと逃げる。こういうシット・イン・プロテストというのをじかに見まして、ああいうのなんだと思いました。これがずうっと続きました。こういうような経験やら、大学の勉強をしながら、わたしは、もっと、もっと彼らの学生生活の中へ入っていきたくて思ったんです。

その時にそれと正反対の、ほんとに昔のテキサス魂をもった学生と知り合いになった。たまたまインターナショナル・オフィスが、留学生を集めてパーティーをしてくれたんです。その時にアメリカの白人の学生が寄ってきて、僕と話をしたんです。1回わたしの家に来なさいよ。今度感謝祭の時にいらっしゃい。彼の家に泊まりがけで行ったことがあるんですが、彼の家は名家で大きな邸宅が、テキサス州の文化財になっているんです。しかも大きな湖も持っており道路標識に彼の家の名をつけたその名がでてくるんです。まるで映画ジャイアンツに出てくる邸宅のようです。大きな別荘や広い草原そして土地の名家ですから友人がいっぱいいます。NASAの人やら牧場主やら。なんか学生運動とかけ離れてしまいです、彼らにはあまりそんな話しません。たまに別荘でパーティーするときに黒人の女の人を招待していました。

ところで、そこの長男が僕の大的仲良しになりました。現在も家族付き合いをしています。その彼が合唱団に招いたのです。そうしたら、オーディションを受けたらどうだと言うんです。1900何年に創立した由緒ある男声合唱団です。国内はもちろん外国へも公演旅行に行くんです。おまえもこの一員に入れ。よし、やってやるぞという感じで、オーディションを受けたんです。そしたら合格しちゃったんですよ。声域はバリトンです。そしたらこれぐらいの楽譜をドサッと渡されまして、40曲ぐらい覚えろ。授業も勉強もしなければならぬ、アサインメントもあり、いろいろする、そしてリハーサルは週に2回です。指揮者はJim Woodle。アナポリスから来ていました。それにみんな白人しかいないんです。男声合唱団の写真を撮りました。これが僕です。その中に一人のスペイン人がいました。ホセ・コロといいます。これで練習をし、昼は勉強し、夜は図書館へ行っても勉強しまし

た。僕のルームメイトのフィリップ・ラッセルは、夜はあまり帰ってこないんです。なぜか。図書館にこもりきりで論文を書いています。彼は学部の時に優秀学生に選ばれているんです。だから僕は良かったんです。良かったんですけど、ちょっと変人で、勉強ばかりです。片一方の友人は、もうアウトドア的な人間で、僕を引っ張り出すんです。それで僕が合唱団に行くと、これは保守的な者ばかりです。僕は三つ又でみんなと仲良くする。これは自分の性格が分裂状態になったりした。だけどみんなと仲良くした。

ところが、いよいよ合唱団が、ヒューストンの大ミュージックホールで公演会をする。3列の場合、僕は一番背が低くて、一番前の真ん中です。ここで公演することになったんです。知人に対する招待券というのが5枚ぐらい配られました。ですから僕は、よくホームステイで泊めていただいた所に、それを送って来ていただいたんです。ところが大きなミュージックホールで、ライトが僕の顔にバーッと当たってしまっていて、全然見えない。そこへ持ってきてコンダクターがいて、僕の顔ばかり見るように見えるんです。

歌詞を忘れてしまって、口をアッと、もうこれは手に汗が出るぐらいの経験です。まあ、皆さんやってみなさい。外国で外国人のお客に対してワーッとやるのは大変ですよ。これもやってみました。みんなでチャーターしたバスでダーッと回るんです。公演するたびに夜は徹夜でパーティーをするんです。これは楽しかった。

それで今度はLPレコードを作るということになった。LPレコードの顔写真も名前も入る。僕は作ったやつを4~5枚買ったんです。日本に帰ってきて、たまたまライシャワーさんが大使の時に、赤坂の大使館に行ってプレゼントしたんです。パシフィック・ブリッジという、アメリカ大使館の英語で出している広報誌があるんです。それに写真入りで載りました。わたしはアメリカ大使館の広報誌にも載りましたし、ボイス・オブ・アメリカでも放送されたんです。わたしは目を付けられたようで、ワシントンの国務省に呼ばれました。

その前にケネディが暗殺されたんです。1963年の11月です。その時わたしはちょうど授業が午前中で終わって、ランチタイムにカフェテリアのチャック・ワゴンというレストランで、オックスフォードから帰ってきた早稲田大学の日本人の先生と一緒に、食事をしていました。チャック・ワゴンというのは食料を積んだ幌馬車隊のことです。テキサスらしいでしょう。その時に、ケネディが今日の4時頃にオースティンの知事公舎に来る。そして副大統領のジョンソンとコナリー知事も一緒にダラスからやってきて、選挙演説をするということでした。わたしたちは期待して待っていましたら、ダラスで撃たれた、病院に入ったという臨時ニュースがあって、みんなびっくりしたんです。それで死ぬことまでは考えない、けがをしたんだろう、だけど大変だということだったんです。

ところが40分ぐらいしたら、死んだということで、すぐに講義はなしで、半旗にしました。そうしてみんな家に帰れ、犯人が分からない、引き続いてどこで何が起きるか分からない、警戒態勢を取るから、町は全部戸を閉めて、家の中に入れということになった。自分は部屋に入って、ルームメイトはまだ帰ってこないから、1人でラジオを聞いていたんで

す。そしたらコナリー知事も重症だと言うんです。それが金曜日だったと思います。池田勇人さんが首相で、フランスはドゴールさんが首相だったんです。そういうことがあって、いよいよ月曜日に国葬ということで、それをテレビで見ました。池田さんもみんなも来たのをずっと見ていたんです。その時にオースティンの町で、どういうことをするかというのを見ていたら、みんなそれぞれが半旗を掲げて、何かをやっているんです。それをずっと歩いて見学して、家に帰ってきました。それから 2 日ぐらいは授業がなかったんです。そして今度わたしたち男声合唱団は、慰安に行くということで、コナリー知事の公舎へ行って、慰めの歌を歌ったんです。そういうことも経験しました。勉強以外にもあれやこれやとやりました。

1964 年の冬休みには、インターナショナル・オフィスが、留学生のために旅行を計画した。あなたたちは帰るべき家がない。学生たちはみんな帰っていて空になった。もしお金を出して行きたかったら、あなたたちも参加してください。僕は参加しました。

大旅行なんです。オースティンから西へずつと行って、ニューメキシコ州へ渡って、そこに世界遺産の大きな鍾乳洞があるんです。そこを見てそれからアルバカーキという所へ行って、そこで泊まりました。それからグランドキャニオンで 2 日泊まって、ヨセミテの国立公園へ行きました。それからサンフランシスコへ出て、モンレーへ行って、ロスアンゼルス、アリゾナのフェニックス、エル・パソ、そしてリオ・グランデ川を渡って、メキシコのフアレスへ行きました。ラスベガスへも行って、クリスマスをしました。それから学校へ帰ってくる。待っているのは試験でした。もう本を抱えていました。これはほんとにいい旅行でした。各国の学生たちとバスの中で歌を歌って、わたしは「木曾の御嶽山」を歌いましたが、みんなはキョトンとしていました。メキシコ人なんか、いい歌を歌っていました。「わたしは英語の歌じゃなく、日本語の歌を歌う」と言って。そんな「木曾の御嶽山」では張り合えなかったです。そういう旅行を楽しんで、いい思い出になりました。

そういう人たちと学校へ行って、授業は別れましたが、イングリッシュ・エジュケーション・アズ・フォーリン・ランゲージでしたから、違う州へ行って、教育実習生ということだったんです。教育実習でインディアナへ行くと言う。僕はうれしかったです。日本でインディアナ州の映画を見たことがあるんで、ここの州歌がものすごく好きだったんです。インディアナポリスにはレース場があります。鈴鹿サーキット、今日もいっぱいでした。そこにホームステイをして、高校生や中学で教えたんです。その時に、ロータリークラブで公演せよ、それからテレビに出よということがあって、仕方なしにやったんです。そのインディアナポリスの地域と今度フォート・ウエインという第 2 の都市、そこへも行きました。そこへ行ったときは、インディアナ大学の音楽の教授をされて、リタイアしていた家にホームステイしました。だから夜になるとピアノを弾いて、歌わされるんです。おまえは歌がうまいから、おれの友達に所へ行って歌え、こっちに行って歌えと、いろいろありました。それも体験だと思っていました。

その時に国務省から呼ばれました。「実はボイス・オブ・アメリカ VOA 放送で放送して

ほしい」と言われた。「何をですか」「あなたはテキサスにいたでしょう。ケネディの暗殺事件に遭ったでしょう。それを日本語放送でアメリカに放送する」。こういうことです。それでワシントンの国務省、ステート・オブ・マーブルと言いまして、何階かに、高層ビルで厚いガラスがある、その前にアメリカ人が、こんなマイクの前で英語でしゃべっているんです。それが終わると、「This if from Washington、これから日本語放送になります」と、日本人のアナウンサーが言った。「今日はフルブライトで来た、テキサス大学で勉強しておられる、上田慶一さんをご紹介します」と言って。「皆さんこんにちわか、こんばんは」と、日本語でわたしはこういうものかと言いながら、ケネディ大統領が暗殺されました、わたしたちは一同、非常に悲しんでいますというようなことを含めて 30 分話した。それが東京のアメリカ大使館でみんな録音されています。わたしの家に送られてきた、そういう経験もしました。またテキサスへ戻って、レポートも仕上げなければならない、いろいろな勉強を続けました。

僕と一緒に住んでいるフィリップではなく、出ていったジェフリー・シエロの話をしませ。実は、彼はモスクワ大学に留学していた。モスクワ大学から帰ってきて、パサデナの方にいました。そしてテキサス大学の学生として勉強していた。

彼と向き合って話してみると、音楽は非常に好き。だけど、この社会を変えないといかん、そういう話ばかりしていたんです。「ウォール・ペインティング・パーティーをやるから来い」と言う。いろいろ壁に書くんです。平気で壁に書くんです。そういうパーティーをやりました。僕は何も書くものがない。日本語で書けというから、古池や、かわず飛び込む水の音、これしか書けない。カエルがポトン。「これは何だ」と言うから、「これは意味深長で非常に歴史の古い、日本では一番有名な詩なんだ。」「おお、これは何だ。」「カエルだ、ポトン、音がするでしょう。」「ああ、それは禅だな、こう言うんです。「そうだ、そうだ」、そんなあほなこと、ばかなことを言った。しかし、後に彼はニューヨークへ出て、ニューヨークにいる間にジョン・レノンと知り合った。ジョン・レノンが訪ねてきた。そして音楽を作る。イマジンに手を貸したというのは、インターネットのホームページに掲載されています。ジョン・レノンが暗殺されました。彼は何とかパンサーというもっと過激な黒人のあれです。それをよく聞きに行っていたんです。

彼は大学を卒業してからどうしたか。オリバー・ストーンという映画監督です。「7 月 4 日に生まれて (Born on the Fourth of July)」トム・クルーズ主演。この映画を見た方がおられると思います。反戦映画です。ベトナム戦争に行ったトム・クルーズが、負傷して帰ってきた。みんなから、ベトナム戦争に行った英雄として見られずに、逆にあんな所へ行ってというように見られる、そして反戦家が変わっていくという悲劇の映画なんです。アカデミー賞を取っているんです。それにジェフリーが助手としてやっているんです。最後のクレジットに彼の名前があります。変名にしていますが、ジェフリーだけジェフと出ませ。ジェフ・ナイトバーグです。実は僕に、「ケイイチ、おまえに 1 回会いたい、おれは名前をジェフ・ナイトバーグに変えて、映画のクレジットに必ず出てくるから見ろ」という

メールが、ジェフリー・シエロからありました。彼は映画産業に変わりまして、ニューヨークとハリウッドとルイジアナのシュリブポートと、3つのオフィスを持って、女優、俳優を養成する仕事をして大成功しています。

僕はテキサスにときどき行っていたんです。アーカンソーもときどき行っています。アーカンソーに行く1つは、僕の友人がアーカンソー大学の教授をしていることです。この教授になったのが、僕の前ルームメイトです。スペイン語をしゃべるから、もう僕は替わると言ったエルネストです。彼はアーカンソー大学の教授になったのです。そこで彼は大牧場を持っているものですから、時々遊びに行くのです。彼と会うのには40年かかりました。僕を探し出して、日本人の留学生があるとケイチ上田というのを知らないか、日本のケイチ上田を知らないか。誰も知らないですよ、そんなことを。たまたま三重県から行った高校の先生が、夏休みの何かセミナーでテキサス大学へ行ったとき、ケイチ上田というのを知らないかと言った。うんと思っていて、あっ、聞いたことがあるな、あっ、あの人だということで、僕のことが分かった。そして知っている、知っている。テキサス大学の留学生で聞いたのは、エルネストの弟です。彼が、「あした会いましょう、そこで教えます」と言って、その晩に、日本のお父さんが危篤だという電報が入った。すぐに日本へ帰られたので、会えなかった。40年かかって、わたしと彼と再会しました。そういういろいろな所での出会いと別れがありました。

日本へ帰ってからライシャワーさんとハル夫人にパーティーに招かれて留学体験の一端を報告しました。

ところが今度は、東京の赤坂のアメリカ大使館に用があって、地下鉄に乗っていたときにライシャワー大使が刺されたらしいということを耳にしました。一緒だったアメリカの大使館員にそのことを告げると、「えっ」と言って、真っ青な顔になり、大使館に飛んで行きました。僕はそこから引き返しました。ライシャワーさんが刺されるというような、本当に血なまぐさい事件があちこちにありました。そういうことも踏まえたわたしの留学体験の一端です

このメダルは、友情のメダルとしてもらったものです。



1964年ひねくれもののEWC生

青井潔 中部工業大学名誉教授

司会・星野：それでは、2つ目の講演は中部大学の青井先生にお願いします。

青井：はい、それではまず上田先生には、この前の時、いきなりお近づきを頂きました。密かに「今日は何をやるか」と、どちらも「成り行きばったりで」と言っていました。どうも上田先生は約束を破った。うま過ぎる。

上田：何を思い付き、そんなもの。

青井：わたしは、ほんとにまともに書けと言われてたら、うちに帰ってゆっくりしないと書けないなと思いました。

まず初めからいきなりこう言います。「青井、おまえは昭和の生まれか。」「はい。」「まだ日本は、こんな昭和の生まれが、助っ人に来てくれるようでは、日本もう駄目だ、あかんよ。」昭和20年7月23日の夜。インドネシアのジャワ島のスラバヤという所があります。あそこからちょっと向こうへ、飛行機で40分ほど行った所に、マディオンという所があります。そこにわたしがおりました。こう言った先輩は、その夜ついに帰ってきませんでした。わたしどもの乗っていた飛行機は、6人乗りの一式陸攻、それから九六式陸攻です。わたしのような若は、旧式の九六式陸攻の操縦員でした。しかも終戦の年、わたしは高校3年の夏休みであった。そのくらい若い年でした。

でも先輩がどんどん、どんどん戦死していきますし、飛行機の補充が付かないものから、いわゆる青葉マークのわたしでも、主操縦員メインパイロットとして、夜間飛行やってバリクパパン攻撃に行ったんです。その1番機で行った蒲池という搭乗整備員、もちろんこれも飛行兵です。同じ整備員でも陸上でなくて飛行機に乗って、エンジンの調整や燃料タンクの切り替え、そういうこと一切をやってくれるから、われわれ操縦員は任せている。その後ろには腕のいい偵察員がいて、今でいったら、電探で何でも、あっちを向け、こっちを向け、地上のシミュレーションで、飛行機が飛び上がれるような時代じゃないんです。われわれが飛行機を覚えたのは、家にいたときに足こぎの自転車しか乗ったことのない時代でした。坂道を上り終わったら、手を離してワーツとやるのがわたしらの喜びだった。これが三重の鈴鹿の飛行場で、昭和18年の6月、初めて飛行機に乗せられて、これが飛行機かと目を回しました。緑色の草が、バーッと絨毯みたいになって、あー、あーと思ううちにグーツと後ろに返って、あーと言っているうちに、あつ、今これからおれは空に上がるんだという感激を覚えたのが、16歳になる手前でした。日本の空を飛んだのは、3日間で45分です。あとは全部南方の地域ばかり飛んでいました。

今度アメリカへ行ったのは、何の喜びで行ったか。また行くのにわたしはだいぶかかって、36歳になっていました。懐かしいアメリカ人に会いに行くという気持ちなんです。先ほどお話があった、こんな厳しいアメリカではなかった、東西文化センターというのは。

お互いに殴り合っ、決定的にこちらはやられた。その相手が懐かしいんです。それから留学生の中に、インドネシアの人もいます。それから前回のときに講演なさった、名前を忘れました。そら、あそこにずっと座っていますね。マレーシア人もいる、フィリピン人もいる、戦争中われわれは侵略者と言われ、どさくさの最後の時にはひどい目に遭わせているけど、わたしらは仲が良かったんです。ハワイに行ったらそういう人たちに会えるというので、上田先生の時のそういう危険というか際どいことは全然なくて、非常に気安く行ったんです。

しかもわたしは、おれは昔こうだったということは、一言も言わない。言うとは懐かしがって来るやつもいるかもしれない。

何せ 36 歳でした。というのは、30 になるまで、復学するのに、わたしはいろんな職業を経たんです。でっち小僧もやりましたし、印刷所の職工もやりました。それから英語は中学校の 3 年までであとは独学です。独学だけでも大学で単位を取る力は、何とかかんとかしてうまくやったんです。今のようなコンピュータがあったら、わたしは二重登録をやっていたかもしれない。とにかく出て、大学の卒業証書と免許をもらえば、文句はないだろう、マッカーサーの野郎がといったような気持ちでした。今は時効だからよろしいでしょう。放っておいたら、わたしはこんな所へ来られるような人間じゃなかったと思います。ただ向こうへ行って、「おれはこうだった」と言うのと、「オー」と言って懐かしがってくれて、抱き締めてくれる者もいます。「昔おれは第二次大戦のベテランだった」と言えば、かつて日本へ来ていた者が、必ず手を差し伸べてくれます。憎むやつはおりません。これを言うと、一緒に留学した人たちの中で、わたしは特別扱いにされます。時には都合良く、時には敵を作るということで、一切黙って 1 年を過ごしてきました。まずそれが 1 つです。

今ここへ来ていらっしゃる珠久さんは非常に若くて、今もそうですけど、ものすごくかわいい学生さんでした。覚えていますか、わたしを。これから述べる方もみんなそうですが、かわいい人ばかりの所へわたしが行きました。

わたしは、昭和 26 年やっ中学校の教員になりました。ただ自分の同級生より 6 年遅れています。だから自分の 2 年、3 年先輩におるのは、僕の下級生だったんです。それから入ったときにどういう芸をやったか。ほんとに中 3 の力ですけど、編入試験というのをやりました。1 年生から受けました。第一わたしは 6 人兄弟の長男です。「長男のおまえが働いてくれなければ、あとの 5 人の兄弟が文句を言う、膨れてしまう。おまえはもう学校へ行かないで、商売でも何でもやってくれ。」懐中電灯を持って、ベッドの中で英語の勉強をしていると、母親がそーっと開けて、「もう頼むから勉強をやめて、まともに働いてくれ」と、こう言われるんです。

その時わたしは岐阜市の東材木町の闇問屋の、繊維の親分のところに小僧に行っていました。今の高島屋が、まだ高島屋出張所と言われた、そこへ行ったりもしました。その行き帰りに何をやったか。商売は全然覚える気がなくて、英語ばかり読んでいました。英語も、中学校 3 年までをまともにやっていたら、何とでもなるというのがわたしの経験です。

編入試験を受ける前に、もうトーマス・ハーディーの短編なんかを読んでおりました。一遍読んで分らないから、何回でも繰り返して読んで、出勤の時に自分の家から駅まで4キロ歩くんです。道々それを読みながら、辞書をかばんの中に、汽車の中で分からなかったことを引いて、そしてあれの面白さ、良さというものを知りました。トーマス・ハーディーというのは、こんなに偉い人だったとは、全然知らない。読んだ作品によって、これはすごい人だと中3の力で知ったんです、あのころ。

従って、編入試験で入りましたが、わたしは昭和2年生まれですけども、昭和6年、7年の者と同級生になった。

そうしたら、彼らの英語の力のなさに驚いた。おれは中学校3年までしか行っていない。あとは軍隊へ行ってたんだ。この時代の力は、まったく、わたしが先生と問答を繰り返していても、「青井さんが先生と何を話しているか分からない、何を聞いているか、わたしには分からない」と言う男女の籍に入ったんです。これは何の犠牲かという、戦争中の勤労働員です。鉄砲やタンクを作りには行ったけれども、休み時間にちょこちょこ授業をやって、ただ通っただけで、中学校の卒業証書、女学校の卒業証書だけは持っている。従って進学はできる。戦争中、英語は排斥されたと言いますが、少なくとも昭和17年度までの中学校3年生で、わたしの行った学校は、徹底的に教えてくれました。そしてこれが好きだったのが幸いしたと思います。

何だかんだで、自分が入った学校で、入学式から卒業式までいたのは小学校だけです。あとは入学式にはいなかったが、卒業式にはいたというのが2つあります。最後には文化センターに行くわけです。何でもかんでも編入、編入で、少しでも金の要らないようにしなければならぬという、信念でやってまいりました。そう言いながら大した力はありません。

ただこの受験の時に、ある非常に研究で有名な中学校でしたが、わたしは新卒で採用されて13年目になっていました。13年いて教生を指導したりしていると、だんだん有名になってくるんです。そこへ行くと、あいつはいろんな作品を読んでいる、新制大学の教生の間でわたしが知られるようになるわけなんです。それがだんだん県内に広がって行って、あいつは相当の小説や文学作品を読んでいる。わたしの考えでは、いい先生であっていいけれども、あした大学の先生になったら、あしたでも大学の教壇に立ってやれるという力をつけて、中学校の先生をやっていたい。そしてこの先生に習ったら1時間目から英語が好きで、好きでしょうがないという生徒を、作らなければいけないというような精神です。そしてただ彼らが隣の高等学校へ進学して、帰りに、「先生、遊びに寄った」「こういう宿題が出て、ちょっと見て」と言うときに、「おお、これはこうだ」と、答えられないような先生になりたくないという、その気持ちが非常に強かったんです。

受験をするということは、わたしどもの場合は、現場経験が3年それから年齢制限が40歳だったんです。そこで現場経験3年になったばかりで受ける人が、非常に大手を振ってやる、試験を受けるのに。これは試験をやったときには、必ず英語教育雑誌や公報にも載

っておりました、ここでこういう試験があると。だから英語の先生だったらみんな知っています。しかもアメリカ文化センターは、金曜日にしか試験をやってくれない。試験を受けに行こうと思うと、どうしても風邪を引いて休まなければいけない、ほんとに。

それからもう 1 つ大変なことがあった。どんな受験資格ができて、受ける資格ができたらずぐ受けなければ駄目だ。後になって、会社で受験するようになって、また後輩ができて、同期生がいて、2 年生、3 年生、係長候補、課長候補になって、一緒に TOEIC 受けようと言われたらつらいだろう、受けられない。それで自分は、TOEIC で滑ったら大変だ。自分はこんな点数だけでも、新任のあいつはおれより高かったといったら、立つ瀬があるか。

教員のわたしたちが、そういうふうにはずいぶん教生を鍛えておりました。だから試験を受けるときに受けられないわけです、そう言う。

1 次試験で滑って帰ってきたら、何が都合が悪いか、駄目だったという通知をもらった、翌日から生徒の顔がまともに見られません。「おれはおまえたちに黙っているけれども、実はおれは英語の試験に落ちたんだ」と言ったら、元気はないです。次は自分の家内、子どもです。うちの父ちゃんは日本一だと思ってくれるはずだが、おれは駄目だったとは言えない。それから近所隣の学校あるいは県内の先生方が、「あいつは大きな顔をしていたけど、教生の時におれをしごいたけれども、あれは駄目だったそうだと」言われる恐れが、英語教員のこういう空気の中がありました。他の人がどうだったか、わたしは聞きたいんです。だから 40 歳になってしまって、「何だ、あんなやつが行くならおれだって行けたのに」ということは言いたくない。だから絶対自信がなければ受けられないと、思って受けたのが 35 歳の時です。そしてこれは県教委も校長も何も知りません。内緒で受けて 2 次、3 次と行くわけです。2 次は面接でした。その時に噂が立っていた。というのは、推薦書が 3 通要るといふ、お願いに行かなければ。

時間があつたら後で述べますが、来月の 20 日に東京の日本記者クラブで、珠久さんもご存じでしょうが、酒井洋子さん、それから湊和夫さん、この 2 人に招かれています。酒井洋子さんは、おそらく珠久さんと同じくらいのお年だろうと思うんです。今、文学座の演出家、翻訳家で、日本文芸協会会員です。この前写真を送ってきましたが、さすがに美人です。ミナトさんは東大出の読売記者だったんです。わたしはあそこへ行ったとき、誰とでも付き合った。珠久さんにも悪くは思われていないだろう。あまり近寄らなかつたから、悪くも思われていなかったらうと思う。珠久さんは、清廉なきれいな人だと思って、わたしはいまだに忘れずに思う方です。あらゆる人、インドネシアの人もマレーシアもフィリピンもタイも、それからアメリカ人ももちろん、それから一緒に行った若い人も、同期の人たちも、みんなあそこで仲良くやってきたと思う。

勉強は大変でありましたけれども、実は、わたしは 1 カ年に渡る日記を付けてきています。今日持ってきましたのは、12 月の 23 日から 1 月の 29 日までの日記で、だいたい 1 日分が A4 版の 1 枚半分になる。その中で (前略)、(中略)、(後略) と書いてありますのは、

わたしは生まれてから夢を見なかった晩は 2 晩しかない、自分が覚えている。あとは必ず夢を見ている。いい夢も悪い夢もとんでもない夢も見っていました。アメリカにいたときに、地球を半周して日本に帰ってきた夢を毎晩見ました。日本が出てこなかったのは 2 晩だけで、あとは日本の夢ばかり見ていました。その夢がしっかり書いてあるんです。目が覚めたら、まばたきするたびに夢を忘れてしまいますから、これはすごい夢だ、これはえらいものが出てくる。西部劇が出てくるときもある。あるいはまた嫌な捕虜収容所に入れられて、ひどい目に遭った、そういう思い出も、何でこんな所へまとも志願して来たんだらうという夢も見ます。面白がって、目がはっきりしないうちに書き込みました。これを（前略）としました。この書き直したものに、もうとにかく全部書いてある。これを今振り返ってみると、本当にやったことは、全部覚えがある。例えばセンターで何か行事があったときに、珠久さんとすれ違ったということも書いてありますけれども、夢だけは全然覚えがないですね。やっぱり忘れてしまう。だけど今読んでみると、あ、こんな夢を見たか。

（中略）と（後略）というのとは何か。買い物に行つて金を使った話とか、映画を見に行つたとか、あるいは寮でみんなとだべつた話で、あまり記録に残すに値しないものは（中略）としました。これはなぜそんなふうにしたか。その酒井洋子さんと湊さんがこれに気が付いて、これを 1 年間送つてくれと言ひ出したもので、夢の中で恋しい女房が出てきたなんていうことは書けないですよ。そういうのはみんな省略です。歯磨きの歯ブラシがすべて嫌だから、丁寧に紙に包んでゴミ箱に捨てたなんていう詰まらないことは書けません。それからフィルムを何本買ったとか、家から手紙が来た。どこからもあつちからも来た。日記の文と手紙の文と、それから有名になつたんですけど、写真を撮ることは大変なものです。日記とそれから家庭や上司に送つた手紙とは、ほぼ同量だと思います。例えば今日は 10 月 13 日だから、13 日のところの日記を取り出して読み始めますと、次の日の 14 日は何だった、15 日は何だったというように、つい徹夜してしまうんです。自分の書いたものは、一番いいものです。

ついでに申しますと、この話は飛びますよと言つて、まだアメリカに着いていないんですから。

上田先生、いいですか。お約束どおり飛び回ります。15 歳 6 カ月から、昭和 22 年の 5 月 9 日に 19 歳 7 か月で日本へ帰ってきました。4 年 1 カ月です。戦争をやつてから 2 年 1 カ月、あとは強制労働所です。センバワンという飛行場で。これはマレー沖海戦の時に、日本の九六式陸攻、一式陸攻が、イギリスのプリンス・オブ・ウェールズとレパルスを撃沈したときに、プリンス・オブ・ウェールズが助けを求めた先です、センバワンのバッファロー戦闘機に。彼らが押っ取り刀で飛び立ったときには、もう船は沈んでいて、こちら 3 機が落とされたけど、89 機ほどで攻めたてて日本の勝利だった。真珠湾の攻撃に続く大きな戦果だったんです。その 4 年 1 カ月の記録を、実は 5 年前に出版したんです。自衛隊からも、戦記作家からもいろんな所からくれと、それから湊さんと酒井さんの手に入ったんです。この 2 人が日記と手記のことをやかましく言い始めた。こういう日記を書くなどジ

ジャーナリストたる俺の仕事なのに、青井さんはよくもそんな時間があつたもんだ。いや驚いた。ああなたの荒れ(著書)は読んだ。わたしは、こういうところ(暗夜のバシー開口)とこういうところ(バンダ海の偽装病院船事件)に感動したり驚いた。魚雷発射がどうだとか、高々度爆撃がどうだとか、夜間飛行がどうだとか、高等飛行の宙返りがどうだったのか。イロハから全部自分の記録として、いたる所まで行って、いよいよ自分がいなくなる前に、・・・これ、飛びますからね、・・・

生きて帰りました 23 日の夜。1 機だけ帰りませんでした。この晩は夜の 9 時半に出発で、5 分おきに出る。編隊で行ったら、あのころのわれわれは全機、撃ち落とされています。途中は高度 5,000 メートルで、酸素吸入器が要るんです。がたがた震いです。タマを落とすときは 7,000 メートルとなっています。それからあれは高度差を 500 メートルつけて飛ばないと、空中で衝突する。真っ暗な中です、灯火管制して。戦後アメリカに何遍も行って、アメリカの広さを知ったのは、その時いたセントルイスで、乗り換える飛行機が遅れて、夜中にギリギリ飛んだときに、何とアメリカは広いと思った。まあ、われわれも暗夜を飛んで帰るんです。

ちょっとアメリカに帰ります。ポツンと灯が見えて、あとは真っ暗です。ずーっと先の方へポツンと灯が見えた。その時はジェット機ですから、すごいスピードで、たぶん高度 4,000 メートルか 5,000 メートルで飛んできれいでした。刻々とこの灯が近付く。これは太平洋のど真ん中で、平和なときに、漁船があちこちで灯をともし漁をしていたら、それは分かるでしょう。戦争中、わたしたちはそんなものはないと覚えていた。つまりジャワ海の何も無いところを夜間飛行やったんです。今では、よく落ちなかったと思います。あの広さとアメリカの広さは同じだと思いました。つまりだんだん近付いてきたのを、上からこうしてのぞいていると、その光の周りに、これは必ずガソリンスタンドなんです、サイミン屋というサイミンというのは食べ物。中国人の 2~3 軒の店がハート形に取り巻いている。高速道路がずーっとあって、20 分ぐらい飛ばないと、向こうの方に見える灯が、自分の腹の下に近付いてこない。これがアメリカの広さだと感心しました。わたしどもは、そういう夜の標識もないジャワ海路を飛んだんです、その腕で。

戦後それで時々、退職してから「先生、海外旅行をされますか」と言われる。おれにハンドルを握らせてくれるならな。人の操縦するような飛行機は危なくて乗れるかというのが、わたしの金がないことの言い訳です。子どものころに自転車に乗れるようになった子の後ろに乗せてもらおうと危なかった。こちらが乗れるから前の子がこう。あれと同じで、いくら 1 万時間、2 万時間乗った、われわれより何十倍も乗った人間よりも、俺がハンドルを握っていた方がほんとに楽です。わたしは今でもどんな飛行機でもよいから乗りたい。ジェット機は駄目です。乗ったことはありません。どんな飛行機でもプロペラ機ならば、貸してもらって乗る。離着陸スピード、離着陸の機首角度、それからこういう乱暴な操作だけではできないとか、こんなものを読んで。あとは地上滑走を 10 分か 20 分させてもらおうと、もう飛行機の方から上げてくれ、上げてくれと請求してくるから、滑走路へ行くぞっと持

って行けばいいんです。アメリカへ行くまでそういうのは乗れなかった。だから羽田を出るときに19年ぶりに飛行機に乗るんだ、しかもジェット機に乗るんだ、あの感激は大きかったです。そろそろアメリカに近付くと思います。

まずわたしは何をやったか。カメラを手にして、窓際の席が欲しかった、なぜか。ハワイに着くときにその途中、6隻の航空母艦から飛び立った、1次、2次の360機の日本の攻撃隊が、雲の上にきれいな朝日が出るのを目の当たりにして、アメリカの放送の電波に乗って飛行機は飛んでいった。その跡を俺は行くんだ。ちょっとあとから進路修正しますが。とにかく夢中で窓際にしがみつきました。軍国主義者じゃありません。今思うと、とんでもない博打打ちの先祖を持ったと、わたしは思っています。とんでもないその先祖に、自分も入りかけた。なぜ自分が入ったかという、家が貧乏で、食うには一番安全だったからです。20歳になれば、あのころは必ずみんなは徴兵に取られる。20歳まで待っていて、行って3日でボンとやられる者もあれば、15歳で行っても生き残っている先輩がいくらでもおりました。それは、まあ、どっちにしてもおれたちは20歳か22、23で死ぬ人間だという覚悟をしていました。その歴史的写真が撮りたかったもので、見事に撮りました。

元に戻ります。人間死ぬ前のいよいよ駄目だと思ふときの、心境はどんなものかと思えます。今のわたしはもう年ですから、察していただけたらと思います。座らせてくださいといつも思っています。あしたかもしれない、あさってかもしれない。でもわたしは家内を死なせて5年間、一人で全部やって暮らしています。

これは軍隊で鍛え上げられたおかげだと思います。どうしてもここへ来るときに足がつかずきます。ただし、わたしは操縦員でしたけれども、後ろに乗っている航法をやる偵察員は、必ず生きて帰れるように、帰りの道をきちっと覚えておいてくれる、昼間だったら。夜だったら星を測って戻ってくる。今のように機首の行く方に従って、ホイホイ帰れなかったんです。昼間だったら、初めて行くときは、島の特徴を見ていくんです。あそこに灯台があった、あそこに砂漠がある、あそこに野牛の群がおるといような島があったら全部覚えてきて、それを頼りにしかも風向を測って、風が右から吹いておる、風速6メートルでそのまま真っすぐ飛んだら、1秒間に6メートル風下にやられるんですから、着くはずの島に着くはずがありません。海へドボンですね。これを見事に修正して日本のパイロットは帰ってきたんです。わたしの先輩がわたしの航法をやってくれたんです。

ですからわたしは、ここへ来るときもその精神を忘れずに。子どもがタベ電話して、「お父さん、あしたは大丈夫か」と。「大丈夫、大丈夫、放っておいてくれ。」電話をかけてきました。わたしは元気ですから、用事の時は来てほしいけど、いらなくなったら早く帰ってほしいんです。どういう所へでも出かける。わたしはこの間から、もう岐阜駅のトイレは中へ入らなければならない。外でもあるけれども遠い。中へ入ってもトイレは何番線にある。普通列車でも一番後ろにはトイレがある。ここへ来るときに、この駅の外へ出たところを、1番線の1番出口のすぐ向こう側にトイレがある。だからそこで用を済ませてくれれば粗相することはない。のどが渴いたら、飲む物はあそこにある。あの1番を上がってこう来れば、

ここの大学があるということを知って来ました。これは昔の飛行機に乗った者の心得だったと思うんです。

もう 1 つです。ちょっと先生も述べられましたけれども、わたしらの生徒の時は、ここは東亜同文書院と呼んでいました。そして今でいうと帝国大学の格があったんです。本当です。台湾には台北帝大というのがあった。京城には京城帝大というわけでありました。上海には、日本の領土ではないから、上海帝国大学なんていうのはできません。だから上海に東亜同文書院というのを作って、しかもあそこは学費がただでした。だからわたしも、もしも親が許してくれて、戦争へ行かなかつたら、あそこへ行こう。あそこへ行ったら、賛成してもらえ。戦争でこの同文書院の卒業生も、みんな学徒動員で取られていったんです。わたしらと一緒に戦った学徒動員は、しかもたくさんいて、わたしらは遅かったです。神宮外苑競技場で、雨の中をザック、ザック、ザックと鉄砲を担いで歩く、学徒たちの足元を見てください。いかに粗末な靴を履いていたか。いかに粗末な巻脚半を履いていたか。日本はあんな状態でアメリカと戦争をしたんだ。あのころには、鍋もお釜も釣り鐘もみんな出していました。それでアメリカと戦争をしていた。もうこの時、少年のわたしは軍隊にいましたけど、どんな戦争だったか分かります。

だからすごい相手だけれども、見事に打ち負かされた。そしてわたしのおじは 3 人戦死しました。パイロットで、わたしよりも 12 年も早かった海軍大尉、これとそれから潜水艦の海軍中尉、潜水艦伊-35 号。みんな 18 年の 11 月 11 日と 23 日に亡くなった。もう 1 人、国鉄の助役をやっていたおじも、フィリピンで、自決第 1 号で戦死しました。そういう家庭に育ったんです。

「とにかく同文書院というのは、すごい所でしたよ」と言って、下の玄関口の守衛さんに。「時間が早過ぎたんで、ちょっと待つので」と言うと、「ここで腰掛けてください」と守衛さんが言った。やっぱり黙っているのも愛嬌が悪いから、パンフレットがあるじゃないですか。「この学校はどういう学校か、あんたは知っていますか。」若い守衛さんは何も知らないです。パンフレットを見せてくれ、ここにこう書いてあると。僕は懐かしいからくださいともらってきました。これはすごい学校なんです。戦争とともに、誇るべき書物や宝物をほとんど中国に収めたんです。でも貴重な物を持って帰ってきているすごい大学なんです、愛知大学というのは。ここはもともと大変なところ。

飛ぶよ、わたしの話は。さて先生、時間が来たら教えてください、5 分前ぐらいに。まだアメリカへ着いていないです。

アメリカに着きまして、あらゆることをこの日記に書きました。授業も試験問題も、一人一人の先生の批評も、褒め言葉も書きました。やがて自分の同期の仲間の批判も書きました。珠久さんたちの純情な張り切った姿。湊さんや、酒井さんや児島正枝さんとか中村さんとか、すごい人たちがおりました。わたしよりももう 10 幾つも年下の人なんですね。この人たちも全部書いてあります。そして何をやったかも書いてあります。あそこへ行って真珠湾を絶対見てくる。真珠湾メモリアルへ行ったのは、メモリアル設立 1 年後のこと

です。わたしのルームメイトのグラント・ハリソンというアメリカの社会科の先生、フランク・三品という 2 世、これのおかげで、わたしより 2~3 歳若い他の 7 人の先生たちは見向きもしないけど、わたしはカメラを提げて、真珠湾を全部写してきましたし、潜水艦も乗せてもらって帰ってきました。アメリカの潜水艦は、冷房が効いているのに感心しました。あらゆる所を見てきた。

ジョージタウンへ行きましたときには、やっぱりあそこで猛烈な勉強をやって、恥ずかしからん成績を取る。成績が悪かったら日本へ送還すると言われた。わたしは前頭相撲で、横綱、大関にならない。常に前さばきをうまくして、十両へ落ちない程度の成績を取ればいいんだという形で、日記に没頭しました。次にカメラです。

それからワシントンへ行きて、国立公文書館へ行きました。毎日曜日に通いました。なぜか。日本が終戦とともに、大本営も外務省も朝から晩まで、ボンボン、ボンボン物を焼いた。わたしたちのいた所でも。そらあの人はまだ生まれていないときに、わたしはあの人たちの頭の上をよく飛んでいたんです。ペナンの向かいのアエルワタルという基地です。その椰子林の中であれも燃やせ、これも燃やせ。戦争に負けた経験のない人間がいかにおろおろになるか。誰がこんなことを言い出した。「家族の写真があったら危ないぞ。特に飛行機乗りなら相手に憎まれている。真珠湾から、ヨーロッパでも憎まれているから皆殺しになるぞ。だから一切の物を焼け。」誰から出るのか偽まやかし命令。わたしの 2 年にわたる履歴の飛行記録というのがあります。何月何日何式の飛行機の何号で、何時間何分飛んでいる。教官は誰だった、あるいは同乗者は誰だったというのが、ザーッと書いてあるのを、みんなで焼いてしまった、わたしの留守中に。わたしはどんなことがあっても、自分の英語の学力で、けんかをしてでも死刑になっても、こいつと自分の階級章と家族の写真と、自分の軍服姿、飛行服姿を絶対持って帰るつもりで。

それから捕虜生活の時に訳した戦艦大和の最期、吉田満、あの方が戦後 20 何年あたりに書いたやつが、実は昭和 21 年の秋にシンガポールの新聞に載ったんです。われわれは大和が沈んだというのは知っていたけど、どんな沈み方をしたのか。わたしが英文を読んで、全部記録したんです。それを持って帰りました。それからわたしのおじの潜水艦を含めて戦艦武蔵、大和が、どこで敵の何に沈められたかということも正確に出ています。それも全部訳して持ってきました。潜水艦のおじの戦死広報は、19 年の 1 月 19 日ですが、これは潜水艦が消息を絶って燃料が尽きた日です。もう帰ってこられない。実は 18 年の 11 月 23 日、マキン、タラワの玉砕でタラワ島の沖でやられて、生存者が 4 人おると、これもここに記録。あそこに行って何をやったかという、日本で焼いてしまった記録があるものを全部調べることと、おじの最期は、できるだけ分かるように調べるといことです。

最後に日本の兵隊さんの遺品があった。アメリカへ 1 年行ってきたわたしの心を、今、休める最大のものは、沖縄の戦争で亡くなった兵隊さんの日の丸を取り返してきたことです。札幌に羽幌郵便局というところがあります。ここの渡辺政夫さんという方が沖縄へ召集された。あの時、祝出征とか武運長久とか、いろいろな人の寄せ書きしたものがありました

す。その郵便局ということだけは分かる。幼児の小さい手形が押しあてられている。小さな子どもです。これをアメリカの学生が、自分の部屋で得々として見せていたのを、1週間かかってうまく取り入れた。「これは沖縄から帰ってきたおじさんに貰った」と言う。あそこソノシートというのがありました。郡上踊りのソノシートを1枚と筑前の竹人形、どれも100円ですが、結局彼にこの2つをやって、うまいこと取り上げて、「もう返せ」と言われなように、かばんの底に縫い付けてしまいました。そして早速、故郷の毎日新聞の記者に知らせました。わたしが出る時に切手代を130円くれて、「何かニュースでもあったら送ってくれ、捜してくれ」と言われました。ちょうど帰ったときに岐阜国体で、その郵便局の女の子が選手で来ていたもので、その子にわたしが手渡す場面を、毎日新聞が岐阜と北海道で同時報道する。「こんなことは嫌です」と、わたしは教育課長に言ったけど、「まあ、まあ、まあ国体だから青井君、君の性格は分かるけど、ここは目をつぶれ」と言っていました。

試験を受けるときの難しさは、内緒、内緒で、教育委員会も誰も知りませんでした。わたしの来てよろしいというのは、翌年、半年たって6月に来ましたが、その4月にすでにわたしは、教育委員会の指導主事に出ていました。その時、岐阜県の中学校英語科指導主事の第1号です。それまでは高等学校の指導主事しかなかった。やっと中学校の教師の中から指導主事が出た。30代の指導主事は1人でした。ただ中部工業大学ではありませんから。昭和42年岐阜県中退のペースです。あそこへ行くことになったのは、恩師の河合茂先生で英語学の大御所のお誘いです。

もう1つの理由とは。恩になって、給料も何もかも県は出してくれましたのに。教育次長が前の校長で、とてもわたしを気に入ってくれて、内緒でわたしの学校の教頭に、「青井君はどうも噂ではアメリカへ行くらしい、何とかやめさせるわけにはいかないか」と言ってきた。あそこフルブライトとか東西文化センターはいかに偉いことか、たいしたものかというのは、他の教科の先生なんかや、その辺の人には分かっていたかどうかとも知りません。われわれの間では大変なものです。何とかやめさせるわけにはいかないかと教頭に言ってきたんです。「おれがあいつに直接言うと、あれは義理を感じて、やめるかもしれない、嫌と言うかもしれない」と。教頭は、「駄目ですよ、先生、青井さんは退職しても行きますよ」。それで9月まで半年間、二等兵になったつもりで、必死に教育委員会で働きました。2倍仕事をしました。そしてあの時、中学校と小学校で文部省の学力試験がありました。その統計を、全部8月末までに文部省に送る。自分管下のその統計を、わたしは1人で任されまして、「これだけをやれば、おまえはもう一人前だから行ってこい」と、やっと言われた。「帰ってきたら猛烈に働いてもらうからな」と言って、給料も何もかも貰って、しかも後任の人を作らなかったんです。

ところが2~3年後に中部大学に行った理由は、何とわたしは酒が飲めないということでした。指導主事というのは半分役人です。その日に、岐阜県加茂郡白川町の奥の方へ行きますと、1時間に1本か2時間に1本しか出ない、山を登るバスに乗っていく。帰りに1日

お付き合いした学校の先生の所へ、役場から金が出るんです。つまり先生たちを慰労してやってくれ。その名目は県から役人、指導主事が来たから歓迎会を兼ねてやるんです。わたしはそういうものに出るたびに、主賓として酒を強いられて半死半生で帰ってきたんです。家内に「おれは60歳の定年までは命がないぞ」。教育委員会で「青井君、おまえは30代だ、まあ、おまえ、10年は教育委員会において、45ぐらいで校長に出るんだな」と、先輩の校長をやった経験の指導主事。これから、校長5分前の古参指導主事たちに、からかわれていました。もういいかげん嫌になっていました。これでは命がない。その2つの理由です。たわいないことです。酒が飲めたら、わたしはもっと素直な道を歩んだでしょう。

でもあそこへ行って、今の中部大学の7学部で29教科、あれが始まるときに、わたしは事務長から、「君の骨は僕が拾ってやる」と言われた。最後に10年間、ある国立大学から、教育学部の英文科の主任教授10年の約束で、ということは55歳で10年だ、64歳が定年になる大学がこの近所にあるはず。皆さん想像がつかかもしれない。そこにイースト・ウエストに行っていたとき親しくなった、珠久さんよりちょっと年上の助教授から打診があった。その人たちと付き合っていた時に覚えられていたのでしょうか。2か月押さえていて、それをわたしは断りました。理事長（そのころの事務局長）が、君の骨は僕が拾ってやるよと、アメリカへ供をさせてくれ、姉妹校オハイオ大学へ何度も長期出張させてくれた。義理人情には弱いくせに、岐阜県には大きな不義理をした。

いよいよおかしい所へポコッと行き、機はあっちへ飛び、こっちへ飛び、人間、ここにやって来ました。

ところで、この日の丸を持ってきたことが、わたしは、アメリカへ行ったわたしの唯一の手柄だと思います。これがまず1つだけ。あそこの公文書館の中で、幼年クラブの新年号から終戦の年までの幼年クラブが全部そろっている。少年クラブも全部そろっている。ずーっとあって、昭和15~16年の2600年の、金のぴかぴかの表紙のこんな厚いやつから、スーッと薄くなって、10ページぐらいの哀れなやつ。それと岐阜県の県庁の職員や教職員の39年の名簿がちゃんとそろっている。

それと慰安婦問題がやかましくなっています。アメリカ軍は、あの降伏式前、マッカーサーが厚木飛行場に着陸した2~3日前に横浜へ上陸した。その時に神奈川県庁が、ある方面に出した第1の指令は何か。その道の1,000人の女性を用意せよ、これだったんです。こういう類のものが大分残っているんです。それがマッカーサーのGHQからの命令なんです。そして大阪府のあるそういう施設、いわゆる妓楼（ぎろう）が県知事に報告書を出した。9月20何日から1週間で、そこにいる女性が10何名で、何人の男を相手にしたかということが、何枚かのあれでカーボン紙に書き写す紙で、はんこをついたやつに書いてあります。1週間に10何名の女性が、何人相手にしたかが書いてあります。この内容は言わぬが花だと思います。話し出すときりが無い、

合図がありました。話はいくらでも引き出す。大概にいたします。このハワイ大学の時の面白さは、もうやる暇がありませんでした。こんなばかな話でよろしかったら、これで

終わりにします。

星野：はい、どうもありがとうございました。ご質問は何か。もう茶話会の方にすぐ入った方がよろしいですか。それとも今ここで、はい、どうぞ。

A：中部工業大学になっています。先生は中部大学。

青井：できましてから行って 2 年目に第 1 回の卒業生が出ました。だから中部工業大学と名前が変わっています。その前は工業短期大学でした。

A：そうです。中部工業大学から中部大学になります。

青井：それで今のようにすごく大きくなりました。

A：そうすると辞められたときは、もう中部工業大学ではなかった。

青井：中部大学でした。

A：中部大学。

青井：短期大学、それから国際関係学部と経営情報学部。それから思うと大変な発展。

A：昭和 2 年生まれと言われました。中部大学は定年までおられたんですか。

青井：はい、おりまして、それから 77 歳になって、またわたしに「おまえにポストを設けたから、もう一度出てこい」という電話がかかったんです。「冗談じゃありません。わたしは今喜寿ですよ、この喜寿の僕がこのこと中部大学に出ていったら、よその学校の手前悪いじゃないですか」と言ったんです。「いや、いや、君は、外見上まだたいして壊れていないから、車でやってこい」と言われました。80 までは勤めておりました。その時はれっきとした教授になった人とか下の人ばかりでして、知らない人たちもたくさんおりました。非常に力の弱い学生が最近入ってきます。英語の試験をやらなくて、まあ無試験で入ってくるとか今年もやる英語 OA 方式何とかとあんなものもあります。しかし、入れた以上は責任を持たなければならんと思って、徹底的にまず英語からやっています。

例えばある生徒が、わたしは自衛隊に行きたい、しかし幹部候補生には行けないから、下士官で行くところに行きたいけれどもという者が来ました。英語は習ったけども、全然、アルファベットから分からないから教えてくれ。こういうのを面倒見てくれるのは青井先生に限る。要するに 77 になったやつは子守がいいと、孫ですね。わたしの主義は、1 時間目からあの先生のおかげで英語を好きになったと、自分がそうだったから、そんならいいよと、これを一生懸命やりましたら、自分で質問するようになってきた。

2 年間でだいたい中学校の 3 年生のところに行きました。自分が空いている時間に、ほとんど毎日来ました。非常に無骨な子で、OA で入ってきたんです。ところが 20 年患っていましたが、家内が亡くなりました。もう駄目だ。「明日も君、来いよ、そうして必ず受かるようにしてやるからな」と言って、彼に約束しておいて、わたしは家内の危篤に立ち会って、それからぶつりと。

わたしは、1 日でも 1 回でも休むということ、非常に罪悪が大きい。そういう先生が他科の先生に出てくると、昇任の時によその学部から横やりが入る。こういうだらしないやつがおるのに助教授とか教授とは何だということになって、上げてもらいたいのも上がらな

いです。先生方もご記憶があるでしょう。よその学部から評判が悪い学部は駄目です。だからそういうことで、みんながよく頑張っていました。その人たちが、そういう子をあやすのは青井先生がいいと、先生にうまいことあの辺にぶつけておこうと。支援センター長が、1日1時間でも休んでは、先生の信用が良くない、学部のためにみんなが良くない、他の人が迷惑するというのは、わたしの徹底した主義です。やかましく言われなかったけど、わたしは1日も休まなかった。わたしは、これでもう1日でも行かなかったら辞めると思っているから、20日ほど「うん」と言わなかった。まだやらせてもいいじゃないか。けどもう行かない。女房が亡くなった。そういうことで、とうとうずっと年下の自分が採用した主任が結局諦めました。そういう教師です。

星野：はい、では、どうもありがとうございました。

これで講演会を終わらせていただきます。



平成 26 年 8 月 1 日

「南シナ海ワークショップに参加して」

三好正弘

愛知大学名誉教授

1980年8月、ホノルルの東西センターで「南シナ海の地質及び炭化水素資源並びに共同研究・開発の可能性に関するワークショップ」が開催され、この1週間に亘る会議に小田滋・国際司法裁判所裁判官のご推薦で参加した。これを皮切りに、その後1年に2～3回海外の海洋法関係会議に参加することになる。小田先生は1976年にハーグの国際司法裁判所に赴任される数年前に CCOP (Committee for Co-ordination of Joint Prospecting for Mineral Resources in Asian Offshore Areas) というアジア海域地質専門家委員会の法律顧問をしておられたが、この1980年の CCOP と東西センター共催のワークショップに招かれても裁判官の立場から参加できないので、海洋境界画定問題をやっている私に代りに行ってくれないか、とお誘いを頂いたのだ。突然のことで不安があったが、ここは度胸試しと考え直してこれを受けることにした。

この海洋地質学専門家集団の研究集会の終わりの方に法律専門家の部会が設定されていて、そこに参加して報告者達の報告にコメントするという役割だった。これはかなりシンドイ仕事であることが予想され、最初参加に躊躇したのもそのためだった。まず彼らのペーパーを読まなければならず、読んだ上でこれをどう料理するか考えなければならぬ。実際に問題だったのは、彼らのペーパーが事前に届く筈のところ、これがその通りにならなかったことだ。いくつかは事前に読めたが、2～3のペーパーは手元に届かず、予めコメントを作成することが出来ないままに出発となった。仕方なく、携帯用の小型タイプライターを持ってホノルルに向った。このタイプライターは1973年ロンドンで入手し、2年間滞在中研究関係ほかの用途に使っていたものだ。

法律家のペーパーの中でとくに気になったのは、大陸棚の境界画定に際して大陸棚が陸地の海中への自然の延長であることを画定規準とする捉え方と、共同開発を沿岸国の法的義務だとする考え方であった。この2点を中心に批判することとしてコメントを作成し、10分ほどのプレゼンテーションを行った。ともかく、これが生まれて初めての海外での英語によるプレゼンテーションだったから、終わったときは「やった!!」という気持ちだった。しかも、自分の流儀で全体を論理構成するのではなく、他人のペーパーを読んでコメントするという仕事で、焦点の絞り方も工夫が必要だったから神経を使った。だから、終わったとき、「やれやれ」という気分と同時に「やった!!」という気分

が沸いてきたのだった。このワークショップの記録は、先ず要約の形で出され、翌年になって全記録が出版された。要約の中で、会議を組織した東西センターのヴァレンシア (Mark J. Valencia) 研究員は、私のコメントを大きく取り上げ、ICJの現役裁判官の紹介で参加した者と紹介していた。上記2点のうちの最初の点について、5月にワシントンの東西センター創立20周年記念大会で出会った韓国の朴椿浩博士の論調を批判したのだったが、心の広い朴さんはその後ずっと仲良くして下さることになる。第2点はロスアンジェルススのゲティ (Getty) 石油会社法律顧問のオノラト (William Onorato) 氏の主張だったが、共同開発が好ましいとするのはよいけれども国際慣習法上の義務だとするところが行き過ぎだと批判し、その後も彼とのこの論争は続く。この点については、『小田滋先生還暦記念論文集』に寄稿した論文に詳しく紹介した。

このCCOP・東西センター共催のワークショップは1983年にも東西センターで、1985年バンコクで、1989年インドネシア・バリ島で、計4回開催され、第2回から法律家の参加が増えて共同開発論が少しずつ深化して行くことになる。そして、第2回のホノルルのとき、CCOP側組織者のリー (C.Y.Li) 氏からCCOPの法律顧問を引き受けてくれないかという話が出た。嘗て小田先生が務められたポストだったが、その後を山本草二教授 (後年国際海洋法裁判所裁判官) が引受けておられたところ、リー氏によると山本教授は余り熱心に協力してくれないので、私にやってくれないかというのだった。大役だけに即答は避け、帰国してからハグに手紙を出して小田先生の助言を求めてから受諾の返事をリー氏に送った記憶がある。リー氏が信用してくれたのは嬉しいことだったが、そのことが早くも第2回の会議で法律部門の取り纏め役の依頼という形で出てきた。第1回は5人ほどの法律家が第2回には10人ほどに増えていたから、その報告の取り纏めとコメントは大変だった。リー氏曰く、「能力のある者は責任も重いものだ。」ありがたい褒め言葉だが、氏自身が台湾の人だったから、欧米の法律家よりもアジアの、それも彼の尊敬する小田先生の推薦で参加した私を取り立ててくれたということだったかと思う。まあ私なりに気を配って仕事をしたとは思うが、中国出身の研究者で在米の人のペーパーにちょっと注意をして上げ、その報告のときにもちょっとした配慮をして上げたところ、帰国してしばらく経ってから、留守中に彼が東京の空港から電話をかけてきて、家内に対し、「ハワイで世話になった中国の者だ、一言お礼を言いたくて電話した。」と伝言を残したという。

この第2回ホノルル会議のときも、オノラト氏との論争を繰り返し、双方の言い分がより明確になったが、どちらも妥協はしなかった。この会議のとき、ハワイ大学ロースクールのジョン・ヴァンダイク (Jon Van Dyke) 教授と知り合った。彼は太平洋上の島嶼群の法的地位について研究していて論文の抜刷りを幾つかくれたが、あるとき昼休みにロースクールに来て一言話してくれないかと誘われた。今や何を喋ったか正確な記憶はないが、何か国際法と文化的要素といったことを話題にしたかと思う。学生達は床に座り込んでサンドイッチを頬張り、ビールやコーラをラップ飲みしているという中での

話しになった。私は別に海洋法の専門家という訳ではなく、一般的なことを話すという
と、1人の学生が立ち上がって外に出て行った。おそらく海洋法に関心の高い学生だっ
たのだろう。15分程度話し終わると、途端に2～3人が挙手して質問をして来た。そ
の質問内容も今や憶えていないが、半ズボンにランニングシャツ、ゴム草履といった身
なりやメシを食いながらという素振りに関係なく、論理に熱心だということが見られた。
面白い経験だった。

やはりこの第2回るとき、東京大学海洋研究所長の奈須紀幸先生と会い、毎日のよう
に昼食、夕食とご一緒にいろいろご教示頂いた。記憶に残っていることでは、ハワイ
諸島は西端のカウアイ島から東端のハワイ島まで、一つのプレートが西に移動しながら
その火山活動が順番に作って行ったものだ、というのがある。ホノルルのダイヤモンド・
ヘッドが死火山で、一番新しいハワイ島が現在なお火を噴いているのはそのせいだとい
うのだ。これは分かりやすい説明で納得がいった。帰国後しばらくして外務省がこのハワ
イ会議の報告会のようなものを企画し、奈須先生と共に報告したことがある。余計なこ
とに奈須先生が私の英国流の英語に触れたものだから、後日国際法学会大会のときだか
に、その外務省の報告会ご出席だった学習院大学の波多野里望教授に「君の英語はクウ
ィーンズ・イングリッシュなんだってね。」と冷かされたりしたものだ。因みに奈須先
生は「キングズ・イングリッシュ」とわれたのを、波多野教授は現在の君主に置き換え
て「クウィーンズ」と言い直されたのだ。

この1983年の東西センターでのワークショップの後、1ヶ月間同センター・環境
政策研究所 (Environment and Policy Institute) でヴァレンシア研究員と協同で東南アジア
海域の共同開発の可能性を探るというリサーチ・プログラムに従事することになった。
この企画はヴァレンシアが仕組んだもので、ゆっくりハワイを楽しめという含みもあつ
たかと思う。家内の滞在分も支給され、確か2000ドルの給料だったと思う。当時の
1ドル=360円の為替レートで72万円だから、相当なものだ。ただ、娘どもがまだ
小さかったので、家内の出張は諦めた。東西センターのリンカーンホールという宿舎に
泊まるから宿泊費は少なくすむし、食事も大学キャンパス内の寮の食堂で済ませるか
らこれも安く上がる。あまり金の使いようのない生活で1ヶ月過ごした。研究は正直な
ところあまり進まず、相棒と相談して帰国してから詰めることとせざるを得なかったが、
毎日の生活は十分エンジョイできた。食堂へ行くと運動部の学生と一緒になったりして、
見ていると肉を皿に山盛り盛ってペロッと平らげ、お代わりをする。そもそも学生食
堂では「お代わり無制限」(unlimited seconds)と書いてある。見ていて気持ちのよいほ
ど彼らは食べる。メシが終わると今度はデザートだ。新鮮なパイナップルを山ほど皿に
取り、その上にうず高くホイップ・クリームを盛り上げてこれもペロッと平らげるのだ。
君は何のスポーツをやっているのと訊くと、バスケット・ボールだといった。こちらも
真似てアイスクリームのお代わりをするくらいが関の山だった。

9月の初めの月曜日が休日になるので土曜日から3連休になるのを知り、観光会社に

頼んでハワイ島旅行を企てた。ホノルルからハワイ島西岸のコナ (Kona) へ飛び、空港でレンタカーしてホテルに向ったが、日本と逆の右側通行で運転席のレバー類も左右逆になっており、最初の交差点でウィンカーと間違えてワイパーのレバーを押したものだから、ワイパーが動き出し、向こう側の運転手が笑っているのが見えた。ラグーンを見下ろすホテルの部屋で1泊して、東海岸のヒロ (Hilo) まで行くのに南回りにしようか北回りにしようかと調べると、キラウエア (Kilauea) 火山が噴火中で熔岩が国道を塞いでいるから南回りはダメと判った。仕方なく距離の長い北回りで行くことにし、道路地図に綿密なメモを記載して曲がり角を間違えないようにした。西から東へ半日以上かかったが、これは道中の景色を楽しみながらの快適なドライブだった。夕方ヒロ名物のホテルのレストランに出掛け、あちこちから聞こえてくる日本語を耳にしながら夕食を楽しんだ。

1985年の第3回ワークショップはバンコクで、日本を出るときは大雪の2月末だった。伊丹空港から飛び立ち途中マニラで1時間ほど休憩があったとき、バンコクの暑さを考えてトイレで薄着に着替えようかとしたが、床が汚くてやめた。バンコクは初めてで、空港に近いホテルが会場だった。前2回のことがある程度知られていたのか、法律家が多く参加した。目立ったのはオーストラリアの法律家で、確か3人来ていて直接報告をすることはなかったが、よく質問していた。後に判ったことだが、その4年後にオーストラリア・インドネシア共同開発協定を結ぶことになるので、その準備に係わっている担当官達であったのだろう。私の公式の報告ではとくに日韓協定について詳しい報告はしなかったが、彼らから非公式に日韓協定について質問されたのを憶えている。日韓の間では、共同開発の小区域において探査と開発の段階で交互に自国の法を適用することになっていたのを彼らは不思議がり、到底考えられないことだと批判的だった。日韓の間ではそれぞれの国内法に必ずしも大きなギャップがなかったから、そのような制度を妥協策として制定したのだ。法律家のグループで割りに時間をかけて議論したのは、共同開発の概念規定だった。この問題にもオーストラリア勢が積極的だったようで、やはりインドネシアとの協定を考えていて、どのような共同作業をどこまで行うべきかといった制度設計に備えていたのではないかと思われる。彼らからの概念規定の質問に対し、ドイツ・ハンブルク大学のラゴニ (Rainer Lagoni) 教授が私案を提示し、これを巡って1日以上議論の応酬があった。これを整理しておきたいと思ったが、元来ノートを取るのが苦手な断片的なメモもしか出来ず、ふと見るとヴァンダイク教授がメモを取っていたので彼に頼んで議論の要約を作ってもらった。これが、後に『小田滋先生還暦記念論文集』に寄稿した論文の執筆に大いに役立った。

バンコクの犬失敗は、報告ではなく報告後の余暇のときだった。私の報告が終わった日、皆で街に繰り出し、私の好みでイセエビの炭焼きを注文し皆で食った。よく冷えた「シンハ」ビールをじゃんじゃん飲んだ。よせばいいものを、プーケット島産というエビの足までしゃぶるように食ったのがいけなかったのか、それまで連日暑い中の会議で

頻繁に飲んでいて卓上の水にあたったのか、その夜猛烈な下痢と嘔吐が襲ってきた。悪いことにその翌日はバス旅行が計画されていて、これを楽しみにしていたのだが、それどころではなく腰が抜けたように身体に力が入らなくなってしまった。辛うじて身支度してフロントへ行き、しかじかの状態だが何か適当な下痢止めでもないだろうかと訊ねると、即座にカプセルを3つほどくれた。これを服用すると、下痢はピタッと止まった。その頃はもう吐き気は止まっていたので、おそろおそろ熱いスープを啜ると、これがスパイスが効いていてまた少しだが下痢が始まった。慌ててカプセルをのむとまた下痢は止まった。こうしてバス旅行はフイにして1日寝ていると調子は戻ってきて、夕食は控えめに食べて事無きを得た。後で皆に尋ねると、ハワイから来たヴァンダイクとヴァレンシアを除いて全員が下痢をしており、一番速く兆候が現れたのはカナダから来た華奢な男だったが、ノルウェーから来たヴァイキングの末裔そのもののような厳つい奴までが1日遅れで犠牲になっていた。どうやら寒いところからやって来た者は、例外なくやられたのだった。そうしてみると、イセエビというよりは水が原因だったかとも思われる。カナダのもう1人の男はニセのローレックスだといって豪華そうな時計を街で買ってきて自慢していたことなども思い出される。こんな風な会議だったせいかな、それとは無関係に会議のロジがそもそも弱かったのか、ホノルルの2回の会議と違って、バンコク会議の記録集はついに出版することはなかった。

この共同開発ワークショップ・シリーズの最後の第4回は1989年バリ島だった。デンパサールのプルタミナ・コテッジ (Pertamina Cottages) が会場となって、1人当たり1軒のコテッジという豪華な宿泊所になった。それは良かったが、この会議のロジは更にひどく、人の良さそうな女性が何人か事務局を務めていたのに能率が悪く、ただ1台のコピー機がほとんど故障の状態では報告のペーパーのコピーが間に合わず、しかも私のペーパーの一部が紛失する騒ぎで担当者に文句を言うと、そもそも英文が読めないとか、読めないから知らぬ間にゴミ箱に捨ててしまったのだろうとか、どこまでも責任逃れを言った。幸い手元の報告用の一部が完全だったので、これを元に事後にコピーさせ皆に配布した。記録集が出なかったことは言うまでもないが、そもそも何をどう議論したか曖昧なままになったのだった。まあ考えてみれば、第3回までの議論で概ね論点が明らかになり、この集団でそれ以上追求しようにも、なすべきことも見つからないというところだったのかもしれない。この頃ロンドンでは「英国国際法比較法研究所」主催の1つの共同開発研究チームが動き始めて報告書も纏まっていたし、この同じ1989年7月にはその第2段階として報告書に基づいて再検討の会議が招集され、私もそれに招待された。1988年に英文の共同開発基礎理論の論文を出していたので、海洋石油・天然ガス共同開発論のパイオニアの一人として丁重な招待を受け、面映ゆい思いがしたが、名誉なことであった。会議後の晩餐会では所長と副所長の間に席を与えられ、旨い料理とワインを存分に楽しんだ。



名古屋フルブライト・アソシエーション 2014 年度総会

2014 年 8 月 1 日（金）愛知大学車道校舎第 3 会議室 午後 6 時より

議題

- 1 2013 年度（2013 年 4 月 1 日－2014 年 3 月 31 日）の事業報告
- 2 2013 年度の決算報告と監査
- 3 2014 年度の事業計画、予算案
- 4 その他

1 2013 年度事業

2013 年 6 月 16 日総会、10 月 13 日臨時総会

The Fulbrighter in Chubu No.23 の発行（ISSN 2188-0638）、会員名簿・会員便りの発行

2 2013 年度決算

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前期繰越	174,903		総会案内	21,189	
年会費	133,500	3,000×41 人			
		9,000×1 人	総会懇親会	36,446	
		1,500×1 人	講師謝礼	10,000	5,000×2 人
懇親会収入	24,000	2,000×12 人			
茶話会収入	4,000	500×8 人			
受取利子	26				
			出版費用	222,145	（臨時総会案内等）
			テープ起こし	14,070	
			郵送料	160	
			茶話会	4,940	
			次期繰越	27,479	
計	336,429			336,429	

2013 年度の収支決算につき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。

監事 小坂敦子

2014 年 8 月

3 2014 年度事業計画

1. 総会、例会の開催

2. 会報 ”The Fulbrighter in Nagoya” No.24 の出版, 発送
 会費未納者には送付しない方針

2014 年度予算案

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前期繰越	27,479		総会案内	21,500	
年会費	150,000	3,000×50 人	講師謝礼	10,000	
懇親会収入	20,000	2,000×10 人	総会懇親会	20,000	
茶話会収入	5,000	500×10 人	茶話会	5,000	
受取利子	16		出版費用	120,000	
			郵送料	2,000	
			次期繰越	23,995	
計	202,495			202,495	

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 1983年10月 1日

改正 1993年 6月 5日、2009年 5月30日、**2012年10月14日**

第1章 総則

第1条 本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を **Nagoya Fulbright Association** と称する。

第2条 本会は事務所を名古屋に置く。

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

- 第5条
1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティアー
 2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティアーで日本に滞在しているアメリカ人
 3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者
 4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者
 5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第2章 事業

第6条 本会は次の事業を行う。

1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動
2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティアーへの指導、援助
3. 日本に滞在するフルブライトグランティアーの研究活動 および滞在中の生活への指導援助
4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認められた時には、臨時総会を開催することができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認
2. 役員を選出
3. その他の本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員

第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条 任期は2年とし、役員の新選を妨げない。

第5章 会計

第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条 正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は1口 年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費 10,000円とする。

第14条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

名古屋フルブライト・アソシエーション役員

- 会長・事務局長 星野靖雄 愛知大学大学院会計研究科教授 1981-82, 1990-91
筑波大学大学院システム情報工学研究科名誉教授
- 副会長 塚田 守 椙山女学園大学国際コミュニケーション学部教授 1981-83
木下 徹 名古屋大学大学院国際開発研究科教授 1989-91
- 幹事 上田慶一 三重教育文化会館元相談役 1963-64
藤本 博 南山大学外国学部教授 1977-80
山本恵里子 椙山女学園大学元教授 1998
Marc Bremer 南山大学経営学部教授
加瀬豊司 四国学院大学名誉教授 1974-76
伊原 正 鈴鹿医療科学技術大学教授 1985-1990
- 監事 和爾赴城 三菱重工・名古屋航空機宇宙システム製作所元顧問 1961-62
小坂敦子 愛知大学法学部准教授 1986

発行年月日	平成26年11月14日
発行	名古屋フルブライト・アソシエーション
事務局	461-8641 名古屋市東区筒井2-10-31 愛知大学会計大学院星野靖雄研究室 名古屋フルブライト・アソシエーション 電話&Fax 052-937-8264 Email: fulbnagoya@gmail.com URL: http://leo.aichi-u.ac.jp/~hoshino/Fulbright.html
印刷	株式会社荒川印刷

ISSN2188-0638

